

St. Luke's International University Repository

Student Affairs Section FY2008 Activity Report: Striving for a Suitable Learning Environment.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大久保, 暢子, 鶴若, 麻理, 中村, 綾子, 天岡, 幸, 枝, 晃司, 近藤, 華子, 福田, 晴香, 横川, 彩夏, 瀬戸屋, 希, 小林, 真朝, 稲田, 昇三, 中山, 久子, 松谷, 美和子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/2816

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



報 告

学生部 2008 年度活動報告 「適切な学びの環境を目指して」

大久保暢子¹⁾ 鶴若 麻理²⁾ 中村 綾子³⁾ 天岡 幸⁴⁾ 枝 晃司⁵⁾
 近藤 華子⁵⁾ 福田 晴香⁶⁾ 横川 彩夏⁷⁾ 瀬戸屋 希⁸⁾ 小林 真朝⁹⁾
 稲田 昇三⁴⁾ 中山 久子¹⁰⁾ 松谷美和子¹¹⁾

Student Affairs Section FY2008 Activity Report: Striving for a Suitable Learning Environment

Nobuko OKUBO, RN, PhD¹⁾ Mari TSURUWAKA, PhD²⁾ Ayako NAKAMURA, RN, MN³⁾
 Miyuki AMAOKA⁴⁾ Kouji EDA⁵⁾ Hanako KONDOH⁵⁾ Haruka FUKUDA⁶⁾
 Ayaka YOKOKAWA⁷⁾ Nozomi SETOYA, RN, PhD⁸⁾ Maasa KOBAYASHI, RN, MN⁹⁾
 Shozo INADA⁴⁾ Hisako NAKAYAMA, RN, MA¹⁰⁾ Miwako MATSUTANI, RN, PhD¹¹⁾

[Abstract]

The St. Luke's College of Nursing Student Affairs Section has launched a new initiative for learning appropriate communication skills and basic manners so that students can effectively fulfill this institution's educational objectives and benefit from a well-rounded campus life. Based on the slogan "achieving a suitable learning environment", three program goals were established to create a pleasant learning experience in which students can attend classes, study and live together. Students, teachers and others involved in campus life are encouraged to get together to think about and discuss A) what kind of learning environment will be most considerate of others so that students will enjoy living together; B) what actions should be taken to realize such a suitable learning environment; and C) how to put the conceived actions into practice. At the beginning of the academic year, action goal "A" was selected as the main priority and opportunities were provided to both popularize the new initiative as well as offer those involved with the learning environment a chance to consider the issues. By implementing a variety of programs, introduction of the initiative was successful to a certain extent as many people involved with the campus were able to get together to talk about the need for proper manners. The next goals to be considered in the future will be to decide the best ways to evaluate proposals and then implement a plan for individuals to translate this campus-wide focus on the need for better manners into action.

[Key words] manners, suitable communication, learning environment, professionals, nursing specialty

-
- 1) 聖路加看護大学 基礎看護学 准教授, 学生部 St. Luke's College of Nursing, Fundamentals of Nursing
 2) 聖路加看護大学 生命倫理学 助教, 学生部 St. Luke's College of Nursing, Bioethics
 3) 聖路加看護大学 看護管理学 助教, 学生部 St. Luke's College of Nursing, Nursing Administration
 4) 聖路加看護大学 総務課, 学生課 St. Luke's College of Nursing, Administration & General Affairs Section
 5) 聖路加看護大学 学部4年 Class of 2009 St. Luke's College of Nursing, Nursing student, Class of 2009
 6) 聖路加看護大学 学部3年 Class of 2010 St. Luke's College of Nursing, Nursing student, Class of 2010
 7) 聖路加看護大学 学部2年 Class of 2011 St. Luke's College of Nursing, Nursing student, Class of 2011
 8) 聖路加看護大学 精神看護学 准教授, 学生部 St. Luke's College of Nursing, Psychiatric & Mental Health Nursing
 9) 聖路加看護大学 地域看護学 助教, 学生部 St. Luke's College of Nursing, Community health nursing
 10) 聖路加看護大学 健康管理室 保健師, 学生部 St. Luke's College of Nursing, School Nurse
 11) 聖路加看護大学 看護教育学 教授, 学生部長 St. Luke's College of Nursing, Nursing Education

〔要 旨〕

聖路加看護大学学生部は、学生が本学の教育目標を効果的に達成し、豊かな学園生活を過ごせるよう、適切なコミュニケーションと基本的マナーの習得のための新しい取り組みを開始した。『適切な学びの環境の実現』をスローガンとし、活動目標 A. 他者を思いやりながら、お互いが気持ちよく生活できる学びの環境とはどういったものかを、学生・教職員など環境に携わる人々がともに考える、B. 適切な学びの環境の実現のための行動を（学生・教職員など環境に携わる人々が）考える、C. 考えられた行動が実践され、お互いが気持ちよく生活できる学びの環境が創られる、を掲げた。

初年度は、活動目標 A. を主目標として、取り組みの普及と学びの環境に携わる人々にマナーについて考える機会を設けた。様々な企画の実施により、取り組みの普及はなされ、学園に携わる人々がマナーについて考えるきっかけをある程度、掴むことができた。今後は、各個人がマナーを行動に移していけるような企画の発案と実施、それらをどのように評価していくかが課題である。

〔キーワードズ〕 マナー、適切なコミュニケーション、学びの環境、専門職業人、看護専門職

I. はじめに

本学学生部は、学生が本学の教育目標を効果的に達成し、豊かな学園生活を過ごせるよう、学業以外の学生生活の支援を目的としている¹⁾。

本年度は、これまでの支援以外に、適切なコミュニケーションと基本的マナーの習得を新しい取り組みとして掲げ、学園全体を巻き込みながら活動してきた。この活動に至る経緯と活動内容、今後の課題について以下に報告する。

II. 取り組みを始めた経緯

近年、本学では、学生の授業、実習態度に対する苦情、アートルーム（看護技術演習室）の使い方の不備、忘れ物の増加などが目立ち始めている。この状況は、本学だけではなく、他大学でも認められる現象であり、現代の若者の課題として他大学でも様々な取り組みがなされている^{2)~4)}。現代の日本には、子どもが豊かなコミュニティ社会を経験せず、核家族化の中で育っていくという社会的背景があり⁵⁾、そのため生活習慣の変化や人との繋がりが減少し、適切なコミュニケーションや人としての基本的なマナーを学ぶ機会が少なくなっている。このような社会背景が、上記の現象を引き起こし、学生生活および学習を行う上での障害になってきている。

マナーとは、広辞苑・大辞林では「行儀・作法のこと」^{6), 7)}とされているが、「生き方そのもの」⁸⁾「人間が気持ちよく生活していくための知恵で、他者を気遣うという気持ちを所作として形式化したもの」⁹⁾「他人に対する配慮であり、思いやりである」¹⁰⁾ともいわれている。また現代の若者は、「適切な言葉の選択能力の衰退」¹¹⁾が指摘され、相手の心を察して、相手にふさわしい言葉を使うことが不得手とされている。さらに自分のマナーは

重視するが、他人に注意することはなく、他人のマナーには積極的に関わる姿勢がないことも報告されている¹²⁾。

本来、人々は、コミュニケーションの中で、マナーの重要性に気づき、より良いマナーが創生されるはずであり、適切なコミュニケーションは、互いが気持ちよく生活していくために、行儀や作法と共に不可欠であるはずである。適切なコミュニケーションと基本的なマナーは、人間が社会生活を営む上でより良い人間関係を築く基本であり、ひいていえば、将来、人とのつながりを大事にして仕事をしていく専門職業人もしくは看護専門職には基盤として欠かせない、求められる資質である。

これらのことから、本学学生部では、4年間の学園生活の中で、学生が適切なコミュニケーションと基本的マナーを養い、適切な学びの環境を醸成できる取り組みを考案した。この取り組みは、「適切な学びの環境の実現」と称し、それをスローガンとして活動を開始することとなった。

III. 「適切な学びの環境の実現」の概要と活動計画

本学のミッションは、「キリスト教精神を基盤として、看護保健職域に従事する看護専門指導者の育成」である。このミッションを基盤として、「適切な学びの環境の実現」の活動目的及び目標を学生部の中で検討した。活動目的は、上記「II. 取り組みを始めた経緯」の箇所ですら通りで、「将来、人とのつながりを大切に仕事をしていく専門職業人となるため、適切なコミュニケーションとマナーを養い、適切な学びの環境を学園全体で醸成することを目的とする」とした(図1参照)。「醸成する」とは、「ある状態が徐々に作り出される¹³⁾」という意味があり、徐々に適切な学びの環境を学園に創っていくという意味を込めている。

活動目標は、ミッション及び活動目的に沿って、「A.

表1 「適切な学びの環境の実現」に対する活動目標と活動計画

活動目標	活動計画
A. 他者を思いやりながら、お互いが気持ちよく生活できる学びの環境とはどういったものかを、学生・教職員など環境に携わる人々がともに考える。	a. 教職員以外にも学生がマナーの取り組みに意識が持てるよう、共に考え、行動していけるように、本取り組みを広める：新入生ガイダンスや講義の前後、自治会ミーティングで学生に知らせること、また職員やチャプレンにも知らせる。
	b. 学びの環境に携わる人々(学生、教職員等)に、マナーについての意見、マナーの内容についてアンケートを行う。
	c. アンケートの結果について公表し、アンケート結果について生の声を聞く。
	d. マナーに関するポスター、標語、ロゴマークを募集し、白楊祭にてコンテストを行う：学園賞、マナー委員会賞などを設け、顕彰する。
B. 適切な学びの環境の実現のための行動を(学生・教職員など環境に携わる人々が)考える。	a. 学びの環境を創っている方々の学園での仕事内容の話をざっくばらんに聞く。
	b. 学園の非常勤講師に授業態度についてインタビューを行う。
	c. 非常勤講師からのインタビュー結果を学生及び教職員に公表し、講義中のマナーについて討議を行う。
	d. 自治会ミーティング、総会でマナーについて取り上げ、学生同士で意見を出し合う。
	e. マナーに関する取り組みがしたいと考える学生等がいたら、一緒に取り組めるような組織づくり、具体的行動を考える。
	f. クリスマスの集いなどで、マナーについての企画を取り上げ、皆で考える機会とする。
C. 考えられた行動が実践され、お互いが気持ちよく生活できる学びの環境が創られる。	a. マナーに関して、学生自身が感じていることを学生に伝えてもらう企画を行う(あくまでも学生主体で強要はしない)
	b. ベストマナー大賞を設け、マナーがより良い学園内の人々を表彰する。
	c. 学園におけるマナー評価を行い(学生だけでなく携わる人々のマナー評価)、結果を公表し、学園が次の課題としていく。

他者を思いやりながら、お互いが気持ちよく生活できる学びの環境とはどういったものかを、学生・教職員など環境に携わる人々がともに考える。」「B. 適切な学びの環境の実現のための行動を(学生・教職員など環境に携わる人々が)考える。」「C. 考えられた行動が実践され、お互いが気持ちよく生活できる学びの環境が創られる。」の3点を掲げた。

活動目標 A. を掲げた理由は以下の通りである。目標の中で「学びの環境を、学生・教職員など環境に携わる人々がともに考える」が、特に重要視される部分であるが、その理由は4点ある。

1点目は、図1のように、学びの環境に携わる人々は、

教員以外にも、事務などの職員、チャプレン、システムエンジニア、守衛や清掃員など様々である。コミュニケーションやマナーは、講義等で学習し習得する内容でもなく、一瞬で獲得できるものでもなく、学園で過ごす日々の中で養われていくと想定される。そのため学園生活で接する様々な人々との繋がりに目を向け、共に考え

る姿勢が重要と考えられるためである。

2点目は、マナーが気持ちよく生活することであるならば、生活習慣やスタイルの変化によって、マナーも変化していくことが考えられ、マナーの基準を教職員だけ、あるいは学生だけの一方的な視点でとらえ、評価していくものではないと考えるからである。

3点目は、マナーの悪さが現代人の課題ならば、学生だけではなく、教職員を初め学生以外の学園に携わる者も自身のマナーについて考え直す必要があると考えるからである。現に、新聞には、「若い世代、公共マナー、大人も直して¹⁴⁾」「若い世代、若者を注意する前に¹⁵⁾」という記事が投稿されている。

4点目は、教員から学生への一方的な説明や指示といった従来の方法では、適切な学びの環境の実現は困難であり、学生自身がそれに関心を持ち、自らが行動する意識を持つことが重要である。学生が教職員と同等の発言ができ、共に考えていくことが必要と考えるからである。

活動目標 A. に沿って、考案した行動計画は、表1のと

スローガン：『適切な学びの環境の実現』

大学のMISSION：本学はキリスト教精神を基盤として、看護保健職域に従事する看護専門指導者の育成を目的とする。
 活動目的：将来、人とのかかわりを大切にし、適切な学びの環境を学園全体で醸成することを目的とする。
 活動目標：他者を思いやりながら、お互いが気持ちよく生活できる学びの環境を、学生・教職員など環境に携わる人々がともに考える。

適切な学びの環境の実現のための行動を考える。
 考えられた行動が実践され、お互いが気持ちよく生活できる学びの環境が創られる。

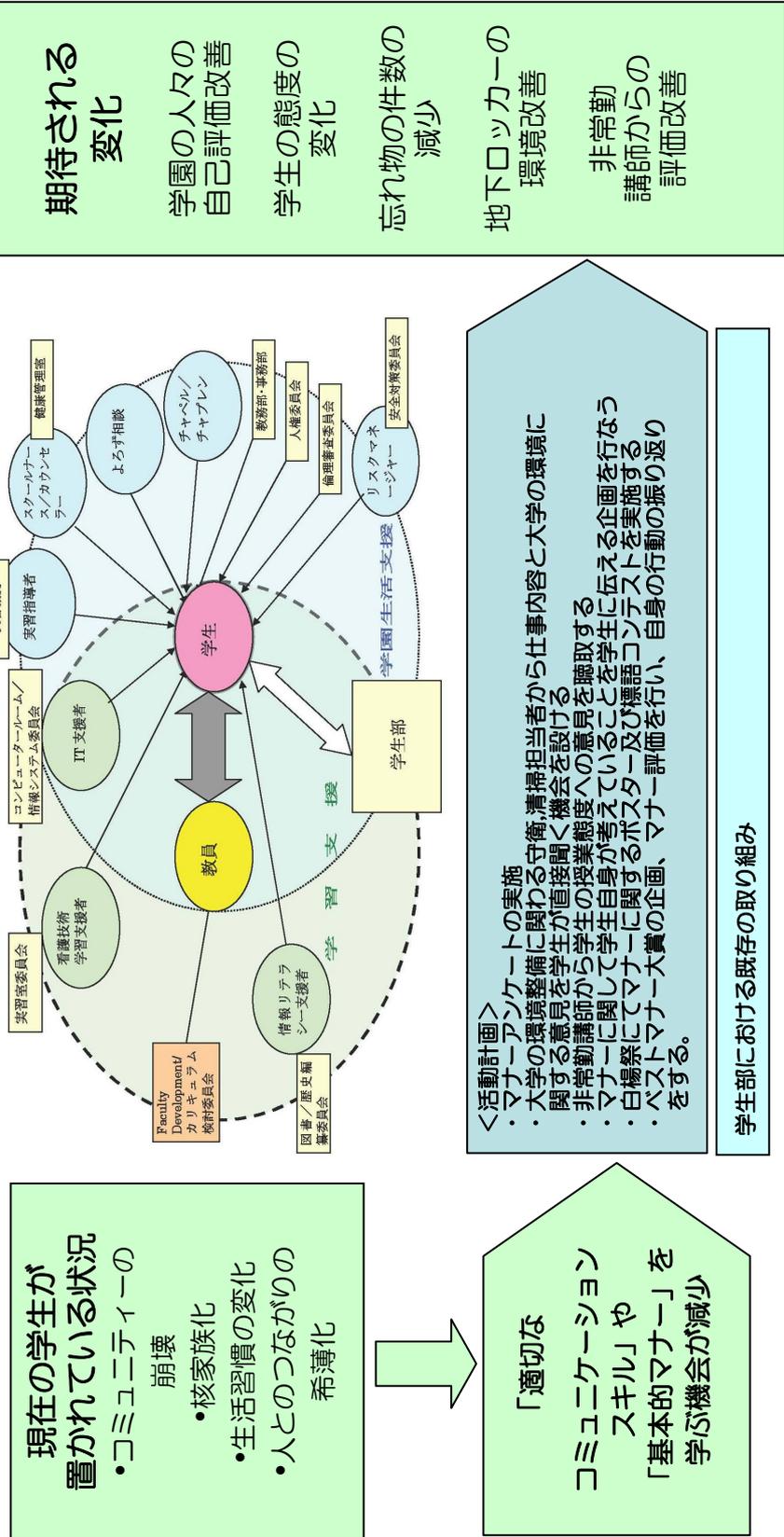


図1 「適切な学びの環境の実現」の枠組み

おりである。

活動目標 B. は、活動目標 A. で出てきた内容を具体的な行動にしていくことである。行動計画には、活動目標 A. を達成することで出てくる内容を取り入れていくことにしているが、それ以外に、具体的な行動を考える材料とするための計画も追加している。

活動目標 C. は、活動目標 B. で挙げた行動を人々が実践できることを狙っているが、それ以外にも自然発生的に学生自身がマナーに関して感じていることを学生に伝える企画を考へることや、ベストマナー大賞を設け、マナーを行動に移す意識を増すこと、マナー評価を行い、個々がより良いマナーの創出に繋げていくことを計画している。

IV. 2008年度の活動報告

1. 取り組みを学園全体に広める活動

4月より、本取り組みを開始する計画であったため、まず学園全体に認知してもらう活動から行った(表1;活動目標 A-a)。学部生1年生の新生ガイダンス、大学院生の入学時のガイダンスを筆頭に、在学生には自治会ミーティング時、講義時に学生部の教員が説明を行った。教職員には、学内ファカルティ・スタッフミーティングにて、非常勤講師、チャプレン、守衛、清掃員には担当教員が、資料をもとに説明を行った。また学内ファカルティ・スタッフミーティングにおいて定期的に報告し、教職員が本取り組みへの認知を維持できるようにした。

2. マナーアンケートの実施と報告

学びの環境に携わる人々からマナーに関する内容について情報収集し、本学のマナー基準の一資料とすること、本取り組みの普及を目的にアンケート調査を行った(表1;活動目標 A-b, c)。対象は、本学教職員、学部生、大学院生で、調査内容は、学生生活や公共の場におけるマナー違反や迷惑に感じたことについて自由記述を求めた。調査期間は2008年3月～5月までであった。配布部数は約540部、回収部数は137枚(回収率25.3%)、内訳は、学部新生90枚(全体の回収部数の65.7%)、新生を除く学部生20枚(14.6%)、大学院生7枚(5.1%)、教職員20枚(14.6%)であった。

結果は、記述項目は132項目、537件認め、マナー違反として最も多かったのは、『公共交通機関におけるマナー』で「電車の中で化粧をする」「電車の中での座り込み、席をつめないなどの態度の悪さ」等が135件であった。次いで、『喫煙に関するマナー』で、「歩きタバコ」や「タバコのポイ捨て」等が44件、『騒音に関するマナー』で、「公共の場や授業中に携帯電話が鳴る」「公共の場で大声で話す」等が30件、『トイレのマナー』として、「洗面台

を汚す」「紙を流さない」等が28件、『ゴミやリサイクルについてのマナー』として、「ゴミの分別をしない」等で22件であった。学内に関するマナーとしては、『授業態度のマナー』で、「授業中の飲食」「授業中の携帯電話の使用」等が75件、『挨拶や会話の仕方』に関して39件、服装に関して7件、約束に関して6件、パソコン使用に関して5件であった。

マナー違反としてアンケートから出てきた内容は、一般大学生が言われている内容¹⁶⁾もしくは大学生でなくても指摘されている内容¹⁴⁾とほぼ同様であった。しかし、『挨拶や会話の仕方』については、他調査と比較して¹²⁾、本調査のほうが上位を占めていた。これは、本学の学生が、卒業後、看護専門職業人になっていくことが根底にあることから、マナーを考へる際に、患者やその家族との会話が想定され、認識、着目度が高く出た可能性がある。

調査結果は、6月に学内ファカルティ・スタッフミーティングで公表し、学生にも自治会ミーティング及び講義前に報告を行った。今後は、この結果を本学のマナー基準の参考としていく予定である。

3. 非常勤講師へのヒアリング調査

2008年7月8日から7月23日まで、前期科目担当の非常勤講師20名に対して、学生の授業態度に関するヒアリング調査を実施した(表1;活動目標 B-b, c)。ヒアリング調査は10分程度で、非常勤講師室にて個別に学生部教職員6名が行った。事前に非常勤講師室のメールボックスに調査協力願いおよび、学生部の「適切な学びの環境の実現」の取り組みの説明書を入れた。ヒアリング調査の質問項目は、1) 授業態度で気になる点、2) 授業態度で良い点、3) 今までの学生と異なる点、4) 他大学と異なる点、5) 本学への要望等の、5項目であった。

授業態度で気になる点は、特に気にならないという回答が一番多かったが、私語、居眠り、遅刻などが挙げられた。授業態度で良い点は、積極性がある、まじめである、よく質問するなどが挙げられ、また他大学と異なる点も、同様に積極性があるとの意見が多かった。今までの学生と異なる点は、授業中に途中退出する学生が目立つ点などが挙げられた。

後期担当の非常勤講師へのヒアリング調査は10月から11月に実施予定であり、それらの結果をふまえて、総合的な考察をしていくこととし、マナーアンケート調査と同様、本学マナー基準の一資料とすること、ヒアリング結果を学生及び教職員に公表し、講義中のマナーとして認識を促していく予定である。

4. 「増井洋子さん、越敏治さんからお話を聞こう」の企画

6月と7月の計2回、学びの環境を支えている人々の



写真1 企画「増井洋子さんから話を聞こう！」



写真2 企画「越敏治さんから話を聞こう！」



写真3 標語を毛筆で清書する有志学生

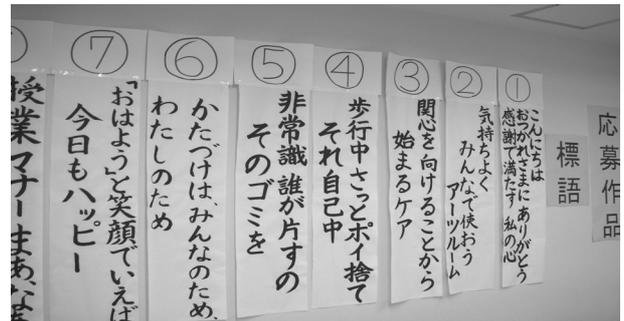


写真4 コンテスト会場 その1

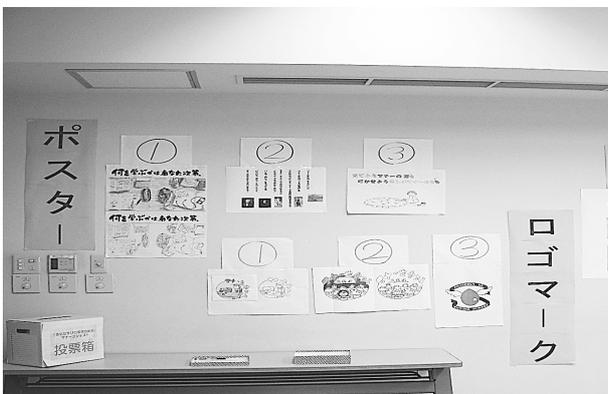


写真5 コンテスト会場 その2

話を聞く機会を設けた。これは、われわれが毎日過ごす学びの環境を支えてくれる人々が、学園内でどのような仕事をしているのかを知ることで、学びの環境は、自然とつくられて与えられるものではなく、人がつくっていること、そしてそのような人々に意識を傾け、感謝の気持ちを持つこと、個人名を知り、挨拶をすること、その上でマナーの大切さを意識することを目的とした(表1；活動目標 B-a)。場所は、学生が多く集う2階ラウンジで行い、お昼休みの20分間を使用して開催した。

6月の第1回目は、2階ラウンジにある学生・教職員食堂で勤務しているシダックス株式会社の増井洋子さんを招いた。司会は、学生部と自治会の代表が行った。増井さんは、簡単な自己紹介を行った後、日頃、学生に定食

を提供している中で感じることを、多量の食材を大学まで運ぶ秘訣などを話してくれた。「学生がさりげなく、美味しかった、ありがとう、と言葉を掛けてくれることが嬉しい」「栄養バランスや金銭面のことを考えて、おかずを選択している学生が多く、感心していること」などが増井さんから話されると、学生は嬉しそうな表情を浮かべた。食材を大学まで移動する際にこぼれないようにする工夫、体力が要ることを話すと、学生は「へえー、大変」と声を出し、増井さんの苦勞を感じ、感謝を表していた。学生から自主的な質問もあり、会場の学生は増井さんに集中し、大盛況のなか終了した。増井さんが昼間に話をすることになり、その間は、立候補した学生(小原彩香さん、Class of 2010)がエプロンと手洗いをを行い、食堂を支援した。会終了後、学生は、感謝カードを増井さんに渡し、日頃の感謝を伝えていた。

7月に第2回目の会を守衛の越敏治さんを招いて同場所、同時間に行った。2回目は、前回の企画で賛同してくれた学生数名が、司会進行(福田晴香さん、Class of 2010)と聞き手(長澤裕美さん、Class of 2010)を務めた。椅子に座りながら、司会の学生は越さんに仕事内容について質問を行った。越さんは、朝の玄関や教室の開錠から始まり、教室や廊下の蛍光灯の交換、印刷機の印刷紙の補充、洗濯物の移送等話し、学生は未知の仕事内容に感動していた。学生から長年仕事を続ける秘訣の質問



写真6 学園賞および作品賞
ロゴマーク部門の受賞作品

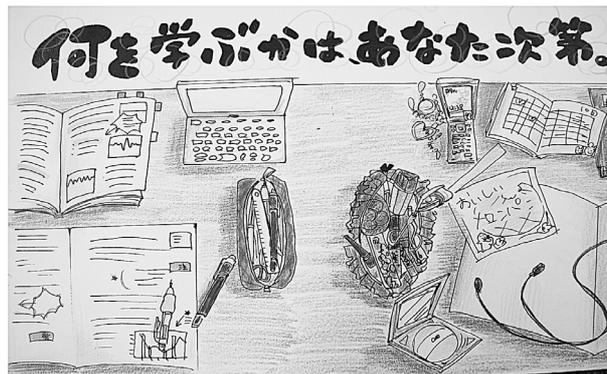


写真9 作品賞標語部門の受賞作品

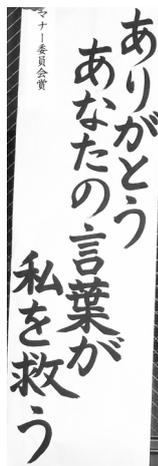


写真7 マナー委員会賞
の受賞作品



写真8 作品賞ポスター部門の受賞作品



写真10 表彰式

があり、「健康が第一」と答えた越さんに、学生は何度も頷いていた。教職員もラウンジの椅子に腰掛け、学生同様に傾聴していた。後日、学生から越さんに会の開催と日頃の感謝を込めて、感謝カードが渡された。

増井さんと越さんによると、会開催後、個人名で挨拶してくれる学生が多くなったとのことであった。

会の開催により、学生及び教職員に本取り組みが更に浸透し、学びの環境に携わる人々への関心が高まり、感謝の気持ちが再認識されたと判断できた。

5. マナー標語、ロゴマーク、ポスターコンテストの開催

マナーに関する標語、ポスター、ロゴマークを募集し、本学の文化祭である「白楊祭」にてコンテストと表彰式を行った。この企画は、非常勤講師やチャプレン、清掃員なども含めた本学の学びの環境に携わる人々が、よりマナーについて考え、それを各個人が表現し、皆と共有していくことを目的とした(表1;活動目標A-d)。

7月から、イントラネット、チラシ、ロコミで募集を

可能にし、10月中旬まで募った。標語は35作品、ロゴマーク3作品、ポスター3作品の応募があった。白楊祭(11月)でのコンテスト開催のために、学生有志とともに準備を行った。標語を毛筆で書くこと、ポスター・ロゴマークの拡大、看板の作成、チラシの配布は有志の学生が担当し(写真3)、本取り組みの趣旨の説明を模造紙に書くこと、投票用紙と箱の作成、開票は教職員が行った(写真4,5)。賞の設定は、最も投票数が多かった作品を学園賞、学生部の教職員・自治会代表・白楊祭実行委員代表・学びの環境に携わる人々のうち参加できる方で話し合い、本学園に相応しいマナーを表現していると考えた作品をマナー委員会賞、標語・ロゴマーク・ポスター各々において最も得票が多かった作品を各作品賞とした。

開票の結果、投票数は32票であった。各賞は写真6～9の通りである。白楊祭のクロージングセレモニー時に学生から賞の発表がされ、賞に輝いた学生及び教員に景品が渡された(写真10)。

応募作品数に比べ、投票数が少ない結果となり、白楊祭で、本取り組みの更なる意識付けを図ったが、期待通りではなかった。各受賞作品を2階ラウンジに展示し、マナー内容を共有することで、更に意識が高まることを期待している。

V. 今後の課題と評価について

本年度は、新しい取り組みの初年度であったことから、学びの環境に携わる人に本取り組みを広め、マナーについて共に考える機会を設けることが主だった。今後は、取り組みを更に軌道に乗せるため、学生の主体性が発揮できるようにすること、学生からの発案もしくは学生部以外の教職員からの発案が増えるような活動を検討する必要がある。また、最終的にはマナーを行動に移していけるかを問うていく必要があるため、学生同士で意見を出し合う組織作り、学園内のマナー評価、ベストマナー大賞の決定を行い、マナーの認識を行動へ変換していく活動を行いたいと考えている。ベストマナー大賞は、学長企画の顕彰活動と連動し、実施する予定である。他委員会の取り組みと連携を取ることで、学園内でのマナー意識と行動に結び付けていけると考えている。

マナーの評価は、何を基準として評価するのが重要な点であり、今後、皆の意見を取り込み、検討を重ねていく必要がある。現時点では、図1に示すとおり、「学びの環境に携わる人々の自己評価」「学生の態度の変化」「忘れ物の件数の減少」「地下ロッカーの環境改善」「非常勤講師からの評価改善」としている。サービス業や医療施設では、マナーについて外部評価を取り入れていることから、その点についても検討の余地がある。また大学4年間で学生がマナーを習得できるよう、段階的にマナー講習を受講させている大学もある¹⁷⁾、¹⁸⁾ことから、本学に合ったマナー活動を皆で発案できることを期待している。

VI. おわりに

本学学生部は、学生が本学の教育目標を効果的に達成し、豊かな学園生活を過ごせるよう、適切なコミュニケーションと基本的マナーの習得のための新しい取り組みを開始した。『適切な学びの環境の実現』をスローガンとし、初年度は、取り組みの普及と学びの環境に携わる人々にマナーについて考える機会を設けた。今後は、各個人がマナーを行動に移していくこと、それらをどのように評価していくかが課題である。

引用文献

- 1) 聖路加看護大学学生部(2008)：聖路加看護大学年報 2007年度(平成19年度)，134-157.
- 2) 中央学院大学：マナー向上キャンペーン，
<http://www.cgu.ac.jp/campuslife/manners/index.html>，
アクセス日 2008/11/10

- 3) 広島経済大学：マナーアップ推進活動，
http://www.hue.ac.jp/info/ab_effort/manner.html，
アクセス日 2008/11/10
- 4) 中部大学：学内マナー向上キャンペーン，
http://www.chubu.ac.jp/event_reports/detail-121.html，
アクセス日 2008/11/10
- 5) 日本総合愛育研究所編。(2008)．日本こども資料年鑑．2008，65-70, 300-312．中央出版．
- 6) 新村出著．(2008)．広辞苑．第6版，2657，岩波書店．
- 7) 松村明監修．(1995)．大辞泉．第1版，2501，小学館．
- 8) 井上弘行．(2004)．大学をよくするキャンパスマナー，第1章マナーの世界，新星出版．
- 9) ウィキペディア．(2008/10/4)．マナーの概要，フリー百科事典ウィキペディア Wikipedia，アクセス日 2008/11/
- 10) 諸橋久美子．(2007)．電車内におけるマナー意識に関しての考察とその意識向上の為の具体案について，学習院大学．学生の提言「公共の場のマナー（携帯から服装まで）」，10．
- 11) 正高信男．(2005)．考えないヒト～ケータイ依存で退化した日本人～，第5章サル化する日本人，中公出版．
- 12) 目片好太郎．(2008)．DATA FLASH 大学生における日常生活におけるマナー，毎日新聞 SPACE, Vol.367, 20-21．
- 13) 新村出著．(2008)．広辞苑．第6版，1384，岩波書店．
- 14) 聞蔵：「(声)若い世代 公共マナー，大人も直して」，朝日新聞オンライン記事データベース聞蔵(2008/8/24)，<http://database.asahi.com/library/main/start>，
アクセス日 2008/11/06．
- 15) 聞蔵．(声)若い世代，若者の言動を注意する前に，朝日新聞オンライン記事データベース聞蔵(2008/2/4)，
<http://database.asahi.com/library/main/start>，アクセス日 2008/11/06．
- 16) 社団法人東京広告協会．(2007)．大学生1000人にきく，日常生活におけるマナーに関する意識調査，3-4．
- 17) 甲南大学キャリアセンター：ハレ晴れセミナー（キャリアアップ編），
http://www.adm.konan-u.ac.jp/cs/schedule_1.html，
アクセス日 2008/11/10．
- 18) 東京聖栄大学：マナー向上運動，
<http://www.tsc-05.ac.jp/support/#manner>，
アクセス日 2008/11/10．